

ふくおか@ふくし

Welfare of Fukuoka



上毛町支会の取組の様子
(関連記事 8 頁)

今号の内容

- P 1 福祉分野におけるICT等の取組
- P 4 ふくふくNEWS 九州工業大学「すぐ創る課」の取組
- P 5 ふくおか“きずな”フェスティバルを開催しました
- P 7 赤い羽根共同募金
- P 9 ふくふくINFO

じぶんの町を良くするしくみ

赤い羽根共同募金

この広報誌は、一部共同募金の
配分金を受けて発行しています。

ふくおか@ふくし
TEL(092)584-3377 FAX(092)584-3369 発行日/2024年(令和6年)3月22日 編集発行/人海見優夫 印刷所/株式会社インテックス福岡

UD FONT
見やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。

令和6年度

<https://www.fukushihoken.co.jp>

ふくしの保険

検索

日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償
ボランティア活動保険



新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が5類感染症に変更されたことに伴い、「特定感染症重点プラン」を廃止して2つのプランとします。

保険金額・年間保険料(1名あたり) 団体割引20%適用済/過去の損害率による割増適用

プラン			基本プラン	天災・地震補償プラン
保険金の種類				
ケガの補償	死亡保険金		1,040万円	
	後遺障害保険金		1,040万円(限度額)	
	入院保険金日額		6,500円	
	手術保険金	入院中の手術	65,000円	
		外来の手術	32,500円	
	通院保険金日額		4,000円	
	特定感染症		補償開始日から補償(*)	
	地震・噴火・津波による死傷		×	○
賠償責任の補償	賠償責任保険金 (対人・対物共通)		5億円(限度額)	
年間保険料			350円	500円

*特定感染症についても10日間の免責期間がなくなり、補償開始日から補償対象となります。
なお、令和5年5月8日以降、新型コロナウイルス感染症は補償対象外となりました。

＜重要＞

- ◆ 基本プランでは地震・噴火・津波に起因する死傷は補償されません。
- ◆ 年度途中でご加入される場合も上記の保険料となります。
- ◆ 中途脱退による保険料の返金はありません。
- ◆ 途中でボランティアの入替や、ご加入プランの変更はできません。
- ◆ ご加入は、お1人につきいずれかのプラン1口のみとなります。

ボランティア行事用保険 (傷害保険、国内旅行傷害保険特約付傷害保険、賠償責任保険)

送迎サービス補償 (傷害保険)

福祉サービス総合補償
(傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険(オプション))

● このご案内は概要を説明したものです。詳細は、「ボランティア活動保険パンフレット」にてご確認ください。●

団体契約者 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

取扱代理店 株式会社 福祉保険サービス

〈引受幹事 保険会社〉 損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL:03(3349)5137
受付時間:平日の9:00~17:00(土日・祝日、年末年始を除きます。)
この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL:03(3581)4667
受付時間:平日の9:30~17:30(土日・祝日、年末年始を除きます。)

福祉分野における

ICT等の取組

職員の負担軽減やサービスの質の向上に資するため、福祉・介護の現場では、ICT（情報通信技術）や福祉機器、介護ロボットの導入が進んでいます。そこで、今号では、福祉施設における導入事例と併せて、今後さらなるICT等の導入を見越して、それらを学ぶためのカリキュラムを新設した教育現場の取組を紹介します。

地域密着型特別養護老人ホームことぶきの森（飯塚市）

インカムによるサポート強化

利用者様の介助中に他の利用者様から声を掛けられ、他の職員に介助をお願いしたくてもどこにいるかわからず、バタバタと自身で対応する…介護施設ではよくあることです。一人の職員に負担が生じていると感じることがありました。

そこでインカムを導入し、お互いが見えない場所にいたときでも職員間でコミュニケーションを取りながら連携して介助を行い、サポートし合える環境を整えました。

インカムの導入により、普段から職員間での声掛けが多くなり、いざという時、すぐにサポートに駆けつけてもらえるという安心感を職員一人ひとりが持てるようになりました。

日々のコミュニケーションが増えたことで施設内のチームワークが向上し、（後述の）見守りCUBE（カメラ）を設置したこともあって、最小限の職員配置でも業務が遂行できるようになりました。

※インカム：イヤフォンとマイクを使って会話ができる通信システム

見守りカメラでリスクマネジメント

当施設は、ユニット型個室のため、居室で生活する中で不意に転倒等が起きた場合、以前は、どのような状況で発生したかわからないこともあり、また、各居室に「見守りCUBE（カメラ）」を設置したことで、どのような状況で事故が起こったのかを検証し、ヒヤリハット事例の積み上げによる防止策の検討を行っています。

また、利用者様がベッドから離れたことを検知し、職員に知らせてくれるシステムも備わっているため、居室内で過ごされている利用者様の生活を尊重しながら、安全点検を行うことができます。

導入する際には、職員から「自分の仕事の評価に使用されるのではない」という不安の声も聞かれましたが、使用目的をしっかりと伝えながら、リスク回避を少しずつ実感してもらえるようになったことで、当初の抵抗感はなくなっていました。

さらに、夜間時の利用者確認においても必要以上に声掛けすることがなくなり、利用者様の睡眠に合わせた介助することができるようになったことも大きな効果の一つです。

状況確認方法の変革

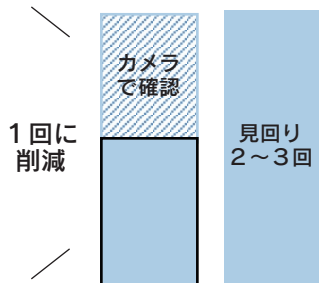
導入前

- ・職員の見える範囲での対応
- ・日中・夜間問わず定期的な居室の見回り
- ・居室ドアの開閉による睡眠の妨げ

- ・職員が関与していない事故時の状況が明確にならない

導入後

- ・不用意な見回り回数削減
- ・利用者様に合わせた睡眠時間の確保
- ・どのような事故においても状況確認・検証ができる



リフト使用で腰痛予防

当施設では、様々なICTを導入していきましたが、特に、リフトの使用定着に時間がかかりました。初めは、リフトを設置しても、使用せずに介助する職員が多かったのですが、ノリリディングケアによる腰痛予防の効果や個々の身体能力に応じたサービスの質の平準化などの導入目的を理解してもらえ、まるで丁寧に研修を重ねました。

また、並行してマニュアルを作成し、使用する雰囲気を作成していただきました。

スマートフォンによる記録業務時間の短縮

食事量や排せつなど日常的な記録をスマートフォンで簡単操作できるシステムを導入しました。パソコンの置いてある部屋に行く必要がなくなり、情報が各記録に自動転記されるため、事務作業の削減に成功しました。分かりやすいアイコンを使用しているため技能実習生も記録しやすいと好評です。

- 申し送り
- 各種記録
- 個人ごとのケース記録



同じことを異なる記録票へ転記不要！大幅に事務作業が減ります！



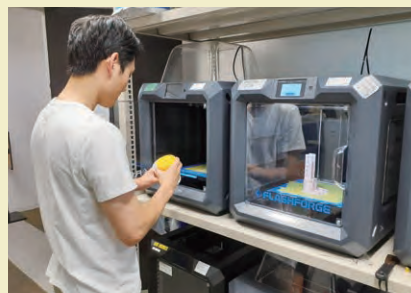
九州工業大学
「すぐ創る課」
の皆さん



「私たちの活動が福祉分野のDX推進につながるように」

九州工業大学では、平成30年にアクティブシニアIoTに関するオープンイノベーション拠点として「スマートライフケア共創工房」を開設しました。そこで研究に関わっている学生が、「福祉機器が開発から実用化までに時間を要する現状を知り、私たちが得意とするものづくりを活かすことで、すぐにも高齢者や障がい者の日常生活がより快適に過ごせるようになるのでは」と考えたことをきっかけとして、高齢者や障がい者が望む装具を迅速に開発・設計するプロジェクト「すぐ創る課」を令和3年に創設しました。

「すぐ創る課」は、『共創』（当事者の個別ニーズに寄り添いながら共に創る創作活動という理念を大切にしながら、当事者の自立や地域貢献等を目的に、現在は14名の学生が活動しています。開発を行うにあたり、最も大切にしていることは、「すぐ創る課」の名前の由来



※DX：デジタルトランスフォーメーションの略

にもなっている「スピード感」です。3Dプリンタや専門的な技術等を活用しながら素早く開発することで、評価から実証を何度も繰り返し、個々のチューニングを行うことができます。相談内容によっては様々な要因で対応できないものもありますが、その場合は、福祉機器等の開発を行っている企業等になぐともあります。個人からの依頼は多くないものの、「すぐ創る課」にできることを積極的に発信するとともに、近隣の大学と協力し合えるような体制づくりを目指しています。

また、「すぐ創る課」では、地域貢献の一環として、小学生向けのワークショップなどのイベントを開催したり、企業のコンテストへ出展するなど、福祉の視点を取り入れてさまざまなものを開発する魅力を発信し続けています。

今後の展望を代表の梶原氏に伺うと「福祉機器に総じて言えることは、個人適応の難しさです。私たちが開発を行うものは全て『人が使うもの』であるため、『当事者と共に創りあげていくこと』を大切にしています。個人の特性に合わせて、どのように設計すれば、簡単にチューニングを行うことができるかを常に意識して製作し続けていたいと思っています。一方で、私たちのものづくりの活動が、少しでも地域の活性化や課題解決につながるようにコミュニティを広げていきたいと考えています」と話していました。



麻生医療福祉&保育専門学校福岡校の介護福祉科では、令和4年度にICT・介護ロボットの知識や技術を学ぶカリキュラムが新設されました。

カリキュラムを導入した経緯を吉水美穂先生に伺うと「本校が介護・福祉業界に少しでも貢献できるようなことはないかと考えたときに、業界の恒常的な人材不足も相まって、現場では業務改善等を目的としたICTや介護ロボットの導入が少しずつ進んでいることに着目しました。

そこで、この現状を学生に知ってもらい、新しい介護のイメージを持ってもらうとともに、この業界で働くことに憧れを持ち『人の役に立つ仕事がしたい』と願う学生が、利用者のために何ができるかを真剣に考える中で、ICT等を活用するという視点も持てるようになってほしいという願いからこのカリキュラムを導入しました」と話していただきました。

また、講義で特に気を付けていることについて、吉水先生は「ICTや介護ロボットの効果を学ぶことによって、それらの導入が当然だと思われぬように、各施設の事情や考え方も尊重しながら講義を行い、ICTや介護ロボットの使い方が分かる、すごい機械が導入されている、というだけの伝わり方にならないように気を付けています。ICTや介護ロボットは、業務改善の手段の一つであり、導入したから何かが劇的に変わるわけではなく、何の課題を解決するために導入するのか、それによってできた時間をさらなるサービス向上のためにどのように使うのかなど、導入が目的ではないことを伝えることが大事であると感じています」と話されました。

実際にカリキュラムを受講した学生からは

ICT・介護ロボットの カリキュラム

カリキュラム変更前は住環境や福祉用具の授業の中で紹介する程度でしたが、令和4年度からカリキュラムを変更し、本校にICT・介護ロボットを設置、科目として導入しました。

授業項目

- ICT・介護ロボット導入の実際
- 理想の介護施設に近づくための課題解決のワーク
- ICT 介護ロボット導入によるオペレーションの変化
- ICT 介護ロボット導入の実際
- ミライの介護：介護現場の課題解決のための「介護のDX化」

導入
施設の
見学
ICT
開発業者
の授業

PHOTO



スマホを活用した記録の体験



施設の方とのセッション

「ICTやロボットは介護とは関係がないように思っていました。導入事例を見たり聞いたりすると、将来的には、さまざまな場面で活用されるようになるのかなと思いました。人の手で行う介護の温もりを大事にしながら、ICT化にも対応できるように知識を深めていきたいです」などの感想が聞かれました。



親子で
楽しめる
イベント
同時開催
しました



ふくおか“きずな”フェスティバル

笑顔でつながる地域の絆

2月18日(日)にクローバープラザ(春日市)で開催した「ふくおか“きずな”フェスティバル～笑顔でつながる地域の絆～」には、県内外で活動するボランティア関係者約1,400人が集い、地域や活動分野を超え、お互いに学び合い、交流の輪を広げました。

本フェスティバルの基調講演では、「ボランティア活動の『いま』と『これから』」コロナ禍を超え「お客様」から「地域の築き手」に！と題して、大阪ボランティア協会 理事長 早瀬昇氏に講演いただきました。

早瀬氏は「ボランティアや市民活動は『してほしいことをする』という考えが『させられる』に変わることで活動継続が難しくなる。『したいことをする』のであれば、やることのできる』に気持ちが変わり、継続的な活動が可能になる」と、誰もが抱えやすい活動の根本的な悩みなど、実践事例を交えながら講演されました。

午後からは、「地域のか×住民のか」住民のか、「社会福祉協議会×義足歴38年の義足レディ」、「学生×?」の3つの分科会に分かれて研鑽を深めました。

「地域のか×住民のか」分科会

東峰村は、高齢化や人口減少による個人商店の休廃業、交通の利便性などの問題により、食料品や日用品の購入が困難な住民が多いという課題を抱えていました。そこで、村民ボランティア団体「東峰村元氣プロジェクト」を中心に廃校となった

小学校の一角で「とうほう百貨店」を開店し、地域やボランティアの力による課題解決や居場所づくりの取組について報告いただきました。

「社会福祉協議会×義足歴38年の義足レディ」分科会

「ともに生きるゆたかな地域づくり」に取り組み岡垣町社会福祉協議会 田之上 亮太氏と義足レディ 櫻たかこ氏から福祉教育の実践報告をいただきました。また、櫻氏が自転車の運転や、ファッションショーへの出演など様々なチャレンジを続けている話とおして、『いくつになってもやればできる、そして、一歩踏み出す勇氣』を参加者に届けていただきました。

「学生×?」の分科会

さまざまな視点で地域貢献等を行っている3つの大学からそれぞれ実践報告(筑紫女学園大学の学生からは、『大学生によるスマホ教室』、九州産業大学の学生からは『障がい者支援施設と連携した商品開発』、福岡大学の学生からは『未来に向けた防災リーダープロジェクト』をいただきました。

参加者からは「学生が地域の課題

①九州工業大学の学生と一緒に工作を体験を行っている様子/②基調講演 講師 大阪ボランティア協会 理事長 早瀬 昇氏/③「親子でいっしょにシュルシュルのびるぼうであそぼう」で楽しく工作している親子の様子/④「手形足型アート」に挑戦している親子の様子/⑤分科会「社会福祉協議会×義足歴38年の義足レディ」でお話いただいた 櫻たかこ氏/⑥分科会「学生×?」で地域の実践報告を行っている様子

に対する解決方法を模索し、その活動が広がることで地域の活性化につながっていく、大変素晴らしい取組だと思えます」とお話をいただきました。

また、分科会以外にも、パネルシアターや楽器演奏、工作、絵本の読み聞かせなど、大野城市中学生リーダーズクラブをはじめとする16の団体による様々な趣向を凝らした催しを行いました。工作やパネルシアターなどの体験を通じて親子のきずなを深めたり、参加者同士の新たなきずなを育む機会となりました。

さらに、スタンプリーや「福点まつり」セルブセンター福岡の協力による「まごころ製品販売」が同時開催され、盛会のうちに幕を閉じました。



令和6年度(令和7年度事業) 共同募金配分申請(広域配分)のご案内

民間社会福祉施設の増改築及び補修、備品及び車両の整備のため、令和6年度の共同募金を財源とする令和7年度事業の配分を希望される施設の申請を受け付けます。

詳細は令和6年4月上旬に本会ホームページに掲載しますので、ご確認ください。



問い合わせ先
福岡県共同募金会 ☎ 092-584-3388
HP <https://fukuoka-kyobo.jp>

#1 対象施設

社会福祉法にいう第1種社会福祉事業のうち入所を目的とするもの(救護施設、乳児院、児童養護施設、障害者支援施設、特別養護老人ホームなど)

#2 対象事業

施設整備、備品整備、車両整備

#3 事業実施年度

令和7年度に事業実施

#4 配分上限額

300万円(総事業費の3/4を限度)

#5 申請受付期間

令和6年4月上旬から5月中旬(予定)



幸せのカタチを 提灯づくりで表現

運動期間を幸せの灯りが照らす



上毛町支会では、これまでの地域福祉活動の経験から、福祉教育を通じた共同募金運動を推進しており、今回、令和5年度のモデル指定事業として、町内で唯一募金運動未実施の小学校を対象に、地域の伝統文化を体験し、福祉を学びながら、子ども達とともに共同募金の応援者を広げていくことを目的に事業に取り組みました。

事前学習で共同募金を学び、募金が幸せにつながる取組であると知った子ども達に「幸せだな」と思う瞬間を八女提灯に描いてもらいました。講師である絵師の指導により、子ども達は目を輝かせ、どんどん筆を走らせます。赤ちゃんが生まれたこと、家族や友達とご飯を食べている時、花火を見たこと、ゲームをしている時……。カタチになった幸せは、町をよくする共同募金の象徴としてこの先の未来を照らしてくれる温かい灯りとなって地域に披露されました。

地域の「ふくし」や「文化」に触れる貴重な体験を通じて、子ども達が発信する幸せの灯りが運動期間への呼びかけとなる素敵な取組となりました。

令和5年度モデル指定事業
上毛町支会の取組

令和6年度

赤い羽根キャッチフレーズ募集



※令和5年度優秀作・特別賞受賞校

県共同募金会では、毎年県内の小・中・高・特別支援学校に「赤い羽根キャッチフレーズ」の募集を行っています。令和5年度は44の学校から5,300点の応募をいただきました。

この募集は、次代を担う児童・生徒が共同募金の理解・関心を深め、自分たちも地域の一員であるという意識や責任感を身に付ける機会としていただけるよう実施しており、赤い羽根共同募金運動を通じて、地域に広がる「優しさや支え合いの輪」や「福祉のまちづくり」をイメージするようなキャッチフレーズを応募いただいたています。最優秀作品は、その年のポスターやチラシなどに掲載し、広報・啓発活動に活用しています。

令和6年度も4月上旬に県内の小・中・高・特別支援学校に募集案内を行い、学校単位で応募いただく予定としております。関係者の皆様には積極的なご協力をよろしくお願い致します。

令和5年度赤い羽根キャッチフレーズ優秀作品及び特別賞受賞校

最優秀作

赤い羽根 心がつながる 支えあい

糸島市立志摩中学校 3年 近藤 咲希

優秀作

つなげて つなげて やさしい心
あたたかい えがお広がる 赤い羽根
すむまちを ささえるやさしさ 赤い羽根
思いやり 未来につなげる 届け物
幸せを 心にこめて この羽根に
あなたから 明日へ紡ぐ 赤い羽根
笑顔の輪 みんなで繋がる 赤い羽根
寄り添って 羽ばたく未来に 赤い羽根
やさしさと えがおをつなぐ 赤い羽根
届けたい 誰かの支えに なりたくて

麻生学園小学校 3年 熊谷 愛彩
北九州市立井堀小学校 4年 山田 彩耶
宇美町立宇美小学校 4年 能角 颯
宇美町立宇美小学校 6年 入江 瑠唯人
糸島市立志摩中学校 1年 山方 誠駿
輝翔館中等教育学校 1年 金子 千花
糸島市立志摩中学校 3年 谷 莉音
福岡県立八幡高等学校 1年 大和 由依
柳川高等学校 1年 池末 美晴
柳川高等学校 2年 田中 咲月季

特別賞

北九州市立井堀小学校 大牟田市立手鎌小学校 麻生学園小学校 宇美町立宇美小学校
須恵町立須恵第一小学校 北九州市立尾倉中学校 福岡市立当仁中学校 福岡市立和白丘中学校
大牟田市立宮原中学校 福岡県立輝翔館中等教育学校 行橋市立行橋中学校
行橋市立中京中学校 糸島市立志摩中学校 福岡県立小倉東高等学校 福岡県立八幡高等学校
柳川高等学校 福岡県立戸畑高等学校 福岡県立三池工業高等学校 近畿大学附属福岡高等学校
福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 福岡市立南福岡特別支援学校 福岡県立柳河特別支援学校
福岡県立筑後特別支援学校



※令和5年度優秀作・特別賞受賞校

令和6年度福岡県 地域密着型サービス 外部評価のご案内



外部評価は、事業所の自己評価を基に、調査員が事業所を訪問して調査を行い、事業所の優れている点や、今後取り組むべき課題を明らかにする仕組みです。

認知症高齢者グループホームは、原則として年1回の受審義務があります。

福岡県社会福祉協議会では、福岡県から選定を受けた評価機関として平成17年度から外部評価事業を実施しています。

【累計1,046件の評価実績】

手数料

・3ユニット以下 90,000円

受審により期待される効果

- ①現在提供しているサービスについて、優れている点や課題が明らかになります。
- ②サービスの質の向上に向けて、具体的な目標を設定することができます。
- ③評価結果を広く公表することにより、利用者や家族、地域からの信頼が得られやすくなります。

評価結果はWAMNET
(ワムネット)で公開
されています。



本会ホームページまたはQRコードから申込書をダウンロードのうえ、FAXでお申込みください。

問 権利擁護センター
TEL 092(584)3610

案 内

福岡県障がい者 福祉情報ハンドブック 2024を発行します



本会では、福岡県から委託を受け、障がい者の制度・施策をとりまとめた「福岡県障がい者福祉情報ハンドブック」を2年に1度発行しています。

平成2年に発行を始めてから、今回で17度目の改訂となる2024年版では、障がい児者を取り巻く様々な制度・施策、市町村が実施する地域生活支援事業等についての内容等をより充実させ掲載しております。

本書が障がい者の支援業務に従事されている方の身近なハンドブックとして、また、障がいのある方々やそのご家族の暮らしの充実のためにご活用ください。

主な掲載内容

- 障がい者福祉制度・施策
県内の事業内容を含めた制度・施策を13分野に分けて掲載
手帳制度/保健・医療・衛生/日常生活援助/教育・育成/療育・訓練/年金・手当/税金/就労/まちづくり・ボランティア/住宅/移動・交通/教養・余暇・スポーツ/情報・通信・コミュニケーション
- 県内市町村の障がい者福祉関係事業等の実施状況
- 各種相談窓口、施設・事業所、地域活動支援センター等社会資源名簿

規格

A4版 395ページ
詳細はHPをご覧ください。

問 福祉情報センター
TEL 092(584)3330

寄附・寄贈の御礼

福岡県火災共済協同組合様 からの寄贈

今年度も福岡県火災共済協同組合様から、社会貢献活動の一環として車いす1台を寄贈いただきました。

この取組は、平成29年度から始まり、高齢者福祉施設や障がい者福祉施設で活用されています。
誠にありがとうございました。

公益社団法人生命保険 ファイナンシャルアドバイザー 協会様からの寄附

生命保険ファイナンシャルアドバイザー協会様は創立25周年を記念して、「生命保険の日(1月31日)」に全国の都道府県社会福祉協議会へ寄附を行う活動を行っており、福岡県では福岡協会様及び北九州協会様合同で多額の寄附をいただきました。

いただいた浄財は、県内社会福祉の推進に有効に活用させていただきます。
誠にありがとうございます。

こくみん共済coop福岡 推進本部様からの寄贈

こくみん共済 coop福岡推進本部様から、創立60周年記念事業として昨年2月、9月に続き、3月に3回目のお米を寄贈いただきました。

寄贈いただいたお米(560キロ)は、各地区の社会福祉協議会を通じて、ひとり親家庭など生活にお困りの方へお米を寄贈していきます。
誠にありがとうございました。

令和5年度福岡県民生委員児童委員大会が開催されました



去る1月29日(月)に令和5年度福岡県民生委員児童委員大会が900名を超える参加のもと開催されました。
開会にあたり、福岡県民生委員児童委員協議会の石橋 壯児会長は、地域住民に寄り添い、課題を発見して専門機関につなぐ活動が続ける民生委員・児童委員への感謝の言葉を述べるとともに、地域共生社会の実現に向けた取組の推進をお願いしました。
式典では、永きに渡り民生委員・児童委員として地道に活動을續けてこられた方々の代表者に対して石橋会長から表彰状が贈られ、被表彰者73名を代表して久留米市の福島哲明さん



が謝辞を述べました。
記念講演では、社会学者・東京大学名誉教授・認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク(WAN)理事長 上野千鶴子氏が「おひとりさまになつても地域で生き生きと暮らしていきける共生社会」と題し、ひとり暮らし高齢者の現状や最期まで在宅で自分らしく安心して暮らしていけるために何をすればよいか、また、介護保険制度の改定などについても様々な視点からお話いただきました。
具体的な事例や時折ユーモアを交えた内容に、会場は笑顔につつまれ、参加者は気持ちもあらたに会場を後にしました。



社会福祉法人による公益的な取組～ふくおかライフレスキュー事業～

社会福祉法において社会福祉法人の責務とされている「地域における公益的な取組」について、福岡県では、平成29年4月から社会福祉施設種別協議会による運営委員会を組織し、公的制度の狭間を埋めるきめ細やかなセーフティネットの構築に向けて、オール社会福祉法人による「ふくおかライフレスキュー事業」の取組を進めており、現在、266法人で407事業所(令和6年1月末現在)が参加しています。
今の社会情勢の変化により「生活困窮」「孤立・孤独死」「DV」など、様々な地域生活課題が広がっており、制度では対応できない問題で苦しんでいる人たちが少なくありません。
本事業は、高齢者の介護・障がい者への支援・児童の養育等、様々な専門性を携え、長年にわたり地域で福祉を支えてきた社会福祉法人がこうした課題に向き合い、訪問・相談を通じて、困りごとが解決できるようにお手伝いを行う社会貢献の取組です。

相談支援の流れ



また、より良い支援に向けたケース検討や情報の共有を行うため、41市区町村で社会福祉法人のネットワーク(地区連絡会)を組織しています(令和6年1月末現在)。
それぞれの地域における社会福祉法人の取組にご注目ください。

ふくおかライフレスキュー
事業運営委員会事務局
092(584)3337

